

を見る心の目の深さを教えられ俳句に志すことになったえにしの尊さをしみじみかみしめている次第である。その心を糧として

角笛の音の夕焼けて遙かなり

群羊と天地溶け合ふ大西日

といったシルクロード旅情や

癒へてなほ癪の翳もつ泰風

島に墓地なし故郷なし雁わたる

など隔離島での病者と一体となって奉仕した感動は、一人の人間の生涯の礎として吾が身を見守っていてくれる様に思えてならない。文学にも人間にも停年はない、日々一本ずつ確かな杭を打込めという河野仁昭先生の至言に素直に従いたいものである。

(女子中学・高等学校教諭)

同志社校地出土の埋蔵文化財(10)

鈴木 重治

伏見人形・犬猿相撲ふしみにんぎょう けんえんずもう(江戸時代)



(中学校新彰栄館増築地点・第二遺構検出面出土・高さ8.6cm)

満面に笑みをたたえた犬と、柔和な表情の猿に、四つ相撲をとらせている姿が、ほほえましい。

灰白色の粘土を素材として、ニギリ、マゲ、ハリツケ、ナデ、オサエ、キザミなど、きわめて単純な手法で造形している。つぶさに観察すると、犬の脇腹や猿の手足

の一部が変色していて痛々しいが、これは二次的な熱、つまり火災による火熱を受けた証拠でもある。宝永五年(一七〇八)の京都大火によるものであるうか。出土の層位と、相伴資料などから、江戸時代の前期の作品と考えられるが、後世の多くの型づくりの伏見人形と違って、素朴さの中に豊かな表現が認められる。

伏見人形は、伏見稻荷社の参詣人の土産物であって、形づくりの素焼の人形に、白、赤、黄、緑などの彩色を施した郷土玩具の一種である。稻荷から深草にかけて産出する良質の粘土が使われたという。江戸時代の最盛期には、稻荷社近くの伏見街道には、五〇余りの窯元と、十数軒の店舗が軒を並べたというが、現在では二、三の窯元を数えるにすぎない。

なお伏見人形の代表的なものは、稻荷社の神使とされる「狐」や「布袋」、「大黒」、「鳩」、「天神」、「牛」、「馬」、「犬」などであるが、同志社校地内の発掘調査で出土した伏見人形の中には、箱庭に用いた「塔」や「橋」をはじめ、ママゴト遊びの「鍋」、「釜」、「竈」などのミニチュアも含まれている。

(同志社大学校地学術調査委員会調査主任)